

横井小楠

—その業績と生涯—

小楠は、1回目の福井交流では越前藩の藩校で藩士の教育などに携わりましたが、弟が亡くなったという
しらせを受け、福井に来た年の12月に熊本に帰ります。帰国後、百余日を過ごした小楠は、安政6年(1859)再び
越前藩から招きを受けました。

第2回目の交流では越前藩の貿易を指導し、また、第3回目には藩政がよくまとまるように助言し、『国是三論』を書いています。

12 越前藩の貿易指導

第2回目の福井入りで、小楠が最も力を注いだ仕事は殖産*と貿易です。越前藩では、橋本左内が数年前から外国貿易を主張し、三岡八郎*は積極的富國論を強調していました。

三岡は、小楠帰国中、四時軒に2か月滞在して小楠の指導を受け、長崎に向かいます。そこで貿易に関する情報収集や越前蔵屋敷の建築を行い、オランダ商館との貿易契約を結びました。藩内にはこの事業に反対する者もいましたが、三岡は各村を巡回し、大庄屋や老農に物産繁殖の計画を熱心に説明して、物産総会所を設けます。藩からはお金の出し入れを検査・監督する役人を付けただけで、運営は商人の自治に任せられます。布・生糸*・茶などの物産を取り扱いましたが、生糸が最も高値で取引できると考え、農家の仕事として生糸をつくる養蚕*を特に奨励しました。取引は予想以上に良好で、その結果、藩の財貨は常時50万両ほど蓄えることができたといいます。

同年8月にかつての同志であった米田是容が病死(47歳)し、10月には友人で実学主義を唱えていた橋本左内が幕府を批判したとして処



▲小楠(右)と三岡八郎の像
(福井市 内堀公園内)

刑(26歳)されました。さらに、12月、実母の危篤の報せに、小楠は急ぎ帰国しましたが、沼山津に着いた時は既に亡くなっていました。72歳でした。

万延元年(1860)2月、越前藩の招きで3回目の交流が始まり、福井で新たに越前藩主となった松平茂昭*と会いました。越前藩での小楠の信望は日に日に高まっていますが、藩内に保守と進歩の両派が発生し、対立するようになりました。そこで、小楠は拳藩一致*に力を尽くし、『国是三論』を著しました。その内容は「富國論(天)」「強兵論(地)」「士道(人)」で構成され、「富國論」では、国(藩)が積極的に外国貿易や殖産興業に取組み、士・民を豊かにすること、「強兵論」では、西欧諸国がアジア侵略を企てようとしている今日、わが国を防衛するには海軍を盛んにすること、「士道」では、文武の源は一つであり、精神修養が大切であること、を論じています。

*国是…国(藩)の方針。

*殖産…産業を盛んにし、生産をふやすこと。

*三岡八郎(1829~1909)…別名 由利公宗。小楠の門人。のちに明治新政府の基本方針『五箇条の御誓文』の原案をつくる。

*生糸…蚕の繭をときほぐして糸にしたもの。

*養蚕…蚕を飼って繭をつくらせる仕事。

*松平茂昭(1836~90)…越前藩主松平慶永が幕府より隠居・謹慎させられ、支藩糸魚川藩主から越前藩主になる。

*拳藩一致…藩全体がひとつにまとまるること。